アンコール遺跡タニ窯跡群第4次調査報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青柳, 洋治, 佐々木, 達夫, 田中, 和彦, 野上, 建紀, 丸井, 雅子, 隅田, 登紀子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17386

7. アンコール遺跡タニ窯跡群第4次調査報告

（期間　1999年3月11日～24日）

青柳洋治／佐々木達夫／田中和彦
野上建紀／丸井雅子／隅田登紀子

はじめに

カンボジア北西部シェムリアップ州のトンレサップ湖北西一帯（アンコール地方）に広がるアンコール遺跡群の東側に窯跡群が位置する。Tani kiln siteは、Angkor Thomの中心Bayonから東17km、East Barayの東北Steleから東北東6 km、平地に小高く盛り上がるPhnom Bokの中央から東北東3 kmに位置する。Bakaong kiln siteはタニ窯跡群の西南西9 kmに位置する。カンボジアではアンコール遺跡の東北方30～40kmにあるプノン・クレンに窯跡のあることが19世紀末から知られていたが、実態は不明瞭であった。クレン山丘とアンコール遺跡群の中間地域の平地部で窯跡群が発見された歴史的意義は大きい。今回の調査目的は窯体の形態・構造の解明のための継続的発掘調査である。

タニ窯跡群の調査経過

南北方向に長く延びる低い砂丘状のダイク上にはタニ窯跡群のA区とB区がある。北側の窯跡群Tani kiln site、Area Bには7基のマウンドおよびその痕跡が残る。重ならない程度の近い位置に5基、そのグループと少し離れた北側に単独で低いマウンドが2基である。5基の窯跡が順次、近くに形成されたような配置である。現在のマウンドの高さはほぼ同じ程度で2～3 m、径は15mほどである。

B1窯は1996年8月にトレンチ調査され、マウンド構成土は窯基礎構築土、窯の崩れ土、廃品であることが判明した。マウンド中央に窯跡基礎を構成する赤色と白色の径10cm前後の砂塊を含む粘土が積み上げられていること、3本のトレンチ部分には窯壁の崩れと廃品が層位的に堆積することが判明した。そこで窯跡の平面構造が円形状か長方形状かが問題になったが、続く1998年9月及び1999年3月の発掘調査で結論を見出すことができた。

1996年作成図は任意の海抜原点を設置したが、奈良国立文化財研究所地形測量図の海抜に合わせて＋2.5mすることになった。1996年作成M1実測図0ポイント（トレンチ交点）は37.3mから39.8mと変更する。1998年はマウンド1を4区に分け、交点は1996年調査時の0ポイントを東側に1m移す。この結果、ⅠA区はトレンチⅠAを含みトレンチⅠAの西側、ⅠB区はトレンチⅠBを含みトレンチⅠBの西側、ⅡA区はトレンチⅡの北側、ⅡB区はトレンチⅡを含みトレンチⅡの南側となる。

窯体部の層位は表土（1層）、焼土混じり土（2層・3層）に分けられる。2層は窯体が崩れた土とそれを覆う土が混じった土層で、3層は窯体が窯内に崩れ落ちたと思われる土層である。

タニ窯跡群Ｂ区Ｍ1窯跡の構造

１．全体形

窯体平面形は中央部の幅がやや膨れた長楕円嚢状の単室窯であり、煙道部、焼成室、燃焼室の３部分からなる。燃焼室は低く、焼成室は傾斜している。焼成室の床面は基本的にほぼ同じ傾斜であるが、床面の改修の結果、緩やかな段を有する形となった可能性がある。燃焼室と焼成室の間には大きな段差があり、燃焼室が焼成室よりもかなり低い位置にある。タイ東北部の窯跡と類似点が多い。

窯体は赤色と白色砂塊混じり粘土を積み上げた基礎マウンドの上に構築されている。基礎マウンドは当時の地表面だった砂地面上に最高部分で高さ3.2～3.5mほど、粘土を窯の平面形に合わせて片側が傾斜して高くなるよう積み上げている。また、壁や天井などにレンガを使用した痕跡は見られないし、出土もしていない。

室内の幅は側壁が遺存している部分で約2.84m、壁の基部の痕跡から推定した室内最大幅は3.00mであり、窯体長（燃焼室から煙道部までの総長）８ｍである。Ｂ１窯跡は少なくとも１回の大規模な改修工事がなされた。その結果、主要な焼成室床面は２面となり、燃焼室も大幅改修前と以後の2時期がある。焼成室下方で２面の奥壁が接する部分もあり、塗り直しとその方法が判明した。作り直しされた新しい燃焼室には、左右に２つの焚き口が復元推定でき、新たな課題を残した。

大規模改修以後の新窯跡をＢ１新窯（以下、新窯）、改修以前の旧窯跡をＢ１旧窯（以下、旧窯）と呼ぶことにする。旧窯は、焼成室傾斜角度が燃焼室に近い部分で急になる。新窯は、燃焼室に至るまでほぼ一定の傾斜となるように床面に貼土されるが、その分だけ燃焼室奥壁が垂直に立つようになった。

２．焼成室

焼成室床面は数回に渡る粘土貼り直しのあったことが、赤く固く焼けた床面の重なりからわかる。上部の床面の厚さは５cmほどであり、上は赤く、しだいに黄色、さらに白くなる部分があり、その下の赤い床面の上に上部床が載っている。上部の床面を床面ａ、下の床面を床面ｂと呼ぶことにするが、さらにその下になる部分にも床面が発見された。これは部分的なもののようだが、床面ｃと呼ぶことにする。基本的な連続する床面はａとｂの2面である。床面ａは新窯に属し、床面ｂ以下は旧窯に属する。焼成室の主体部の床面は18～22度とほぼ同じ傾斜をもっているが、燃焼室に近い箇所は傾斜がきつい。床面ｂの段階で約50度、床面ａの段階で約33度である。もっとも床面ｂの段階の傾斜のきつい部分については焼成室というよりは燃焼室上部と考える方が妥当と思われる。そして、そうした燃焼室に近い傾斜のきつい部分は床もしっかり焼けており、その箇所では自然釉が付着した窯片も出土しているが、傾斜の緩い焼成室の主体部の床面は赤褐色に焼けているだけで表面ももろい。

床面の傾斜が変わる部分では側壁のラインも屈曲している。床面構築後に床面の平面形に合わせて壁を築いた可能性がある。そのため、壁のラインが直線的とならないのだろう。焼成室に残る側壁の現状は、高さが低く僅かな残りであるが、そのほとんどが床面に対してほぼ垂直に立ち上がっている。燃焼室と焼成室の境の位置の側壁のみ窯の外側に向かって斜めに立ち上

がっている。

また、床面が窯の側壁の下にもぐり込んでいる部分が見られる。これは床面構築後に側壁を築いたことを示している。そうした壁の修復が床面と同様に行われている。

焼成室に出入口があった可能性があるが、床面と壁基礎部を調べても、出入口の痕跡は発見できなかった。この点については、他の窯跡の発掘で確認することが必要である。

燃焼室の窯内土層（2層）から断面台形状の細長い窯材が出土している。本来の位置については不明である。焼成室内を区切っていたか、あるいは火除けとして燃焼室と焼成室を区切っていたか、いずれかで使用された可能性がある。これも次回調査の確認事項となろう。

3．燃焼室

燃焼室は平面が半円形となる。新窯の燃焼室奥壁下部はほぼ平坦な床面から垂直に90～110cm上がり、急斜面の焼成室床面部分になる。側壁下部はほぼ垂直で、側壁上部は残存しない。旧窯の燃焼室の奥壁は未発掘だが、床面は新窯の燃焼室の床面より低く、奥壁下部の傾斜角度は新窯の燃焼室の奥壁より緩く、焼成室床面に傾斜して続くようである。

燃焼室の床面は、時期差のある床面a、b、cの3面がある。最下の床面cから奥壁通炎孔までの高さは110cm、最上の床面aから奥壁通炎孔までの高さは90cmである。奥壁幅は250cmである。床面aは、やや黒みを帯びた灰混じりの薄い層が上面であり、部分的に黒い固い面になる。その下方には焼土塊がつまり、下部は茶褐色粘土も混じる。床面bには炭が堆積している。床面cの表面はあまりはっきりしない。床面cの下面は、マウンド堆積粘土と同じ赤色と白色の粘土となる。

焼成室だけでなく、燃焼室も大幅な改修を行っており、燃焼室の大規模改修前の床面は床面c、改修後の床面が床面b、床面aである。燃焼室の床面a、b、cと、焼成室床面の貼りなおしのa、b、cとは、必ずしも対応するとは限らないが、どちらも大幅改修回数は1回である。焼成室床面の部分的貼り直しは頻繁に行われたと推定できるが、燃焼室の大幅な改修は回数が少ないと思えるから、大規模改修時は同時の可能性が高い。ただし、新窯の燃焼室の焚口部分の壁も何度か塗った跡が見える。床面は黒く固くなるが、壊れた部分にはマウンド堆積粘土と同じ赤色と白色の粘土が見えるから、人工マウンドの上に燃焼室も築かれているようである。

燃焼室と焼成室の境で、急斜面床上に仕切壁があったと思われるが、その急斜面床上で左右側壁の中央に、粘土製円柱を立てたように見える痕跡が残る。粘土製円柱は燃焼室内の焼土堆積土上に折れて落下しており、もっとも長い部分で70cmほど残る。もっとも細い部分で径36cmである。急斜面焼成室床面部分と燃焼室内の落下土上にずれた円柱部分が10cmほど残るから、少なくとも円柱部分の長さは80cm＋αある。円柱の表面は灰色であまりよく焼けていない。燃焼室床面から円柱の上部まで170cm以上あることも推定でき、燃焼室内から見ると、人が通れる孔が二つ開くことになる。分炎柱を兼ねる柱である。しかし、燃焼室床面からは高くて、非常に通り難いから、製品を焼く焼成室に出入口があった可能性を否定できない。

燃焼室の奥壁は燃焼室床面cより約26cm高い部分（燃焼室右隅部）までは、旧奥壁がそのまま表面に残る。それより上は新窯の燃焼室奥壁がほぼ垂直に、あるいはオーバーハングするように塗られており、旧窯の奥壁は現状では見えない。旧窯の奥壁は右隅部の観察によれば約

26cmの高さで奥に傾斜をやや緩くして屈曲し、旧窯の床面（床ｂ）につながるものと推測される。そのため、この窯の燃焼室の当初の形態は最終段階のそれと異なっていた可能性が高い。保存処置時に、一部分について確認することも必要である。

新窯の燃焼室の奥壁表面は指で撫ぜた跡がよく残る。左斜め下へ、あるいは左斜め上などに泥を手で擦り付けた跡である。奥壁はほぼ垂直であるが、右側ではオーバーハングしている部分さえある。奥壁の通炎孔下の部分、すなわち焼成室床面につながる部分の奥壁角には、小さな焼台を張りつけている。左側は角部分だけ一列だが、右側は奥の方へ数列並んでいる。すでに剥がれたものもあるが、痕跡は見える。炎の直接当たる場所であるから、製品を置くのに適してはいない。実際に製品が置かれたかどうか、あるいは置いたがうまく焼けなかったのではないか。

旧窯の燃焼室の右側壁部分は上塗りされている。奥壁も上塗りされていることが、側壁と接する部分の状態からわかる。左側側壁は旧壁を下部だけ残し、その上に新しい床（床面ｂ、a）を作るから、新窯の燃焼室の左側側壁は上塗りではなく作り直しである。

燃焼室は左右に１つずつ計２つの焚き口があったと推測され、その場合、改修した時点で２つの焚き口をやや左側に移動している。ただし、燃焼室手前側については未調査であり、確実に二つの焚き口を有していたか、確認する必要がある。

旧窯の燃焼室の床面ｃは、室外側の手前にあたる焼土塊部分の下の面とほぼ同じレベルとなる。新窯の燃焼室の床面ａは、室外側に堆積した焼土塊などの上面になり、これも新床面と室外側面はほぼ同じ高さとなる。

４．煙道部

マウンド頂上部分に、煙出部の床面と推定できる赤色焼土の塊が、地表面に一部残るのみである。赤色と白色砂塊混じり粘土の基礎マウンドの上に、直接構築されている。マウンド頂上部の煙出し部の傾斜はほとんどなく水平であるが、焼成室の床面へと続く箇所の傾斜は約36度である。焼成室や燃焼室で確認された大規模改修の痕跡は確認することができなかった。

５．窯道具

窯道具は数種類の形態が出土したが、数量はきわめて少なく、いずれも粘土製焼台である。薄い円盤形状品と円筒状棒状品が第３次調査で出土したが、第４次調査でも窯道具の出土は非常に少なく、焼台だけが少量出土している。径11cm、９cm、７cm、５cmほどの平面円形状品があり、径９cmほどの中型の割合が多い。これらは平面が円形、断面は上面がほぼ平坦で、周辺がやや盛り上がり、下面は床の傾斜に合わせて斜めとなるものが多い。傾斜した焼成室床面に置くと、上面が平坦になる。円盤状に近いものも少数ある。径５cmほどの小型の焼台は、燃焼室奥壁から焼成室に変わる角から焼成室床面にかけて、簡単に張り付いた状態で数列分が発見された。すでに残らない部分も、取れた痕跡が床面に見られた。いずれの焼台も円形の跡が表面全面に残り、その周辺は押されて盛り上がった状態となる。

6．出土品

出土品は、灰釉陶器、無釉陶器、無釉瓦。灰釉陶器は合子が多く、碗もある。第4次調査では盤口小瓶が稀であり、窯内に残ることが少ない。無釉陶器は壺片が多い。瓦は装飾のある部分がきわめて少なく、半丸瓦である。

出土品の採集位置について。焼成室床面aと床面bの間の層から灰黒色焼締陶器片。燃焼室第3層から、灰黒色焼締陶器片と灰釉陶器片が付着した状態で出土。燃焼室第3層から、灰釉合子の蓋（Fig.5-6）、摘みは4弁花状の突出した形が出土。

前回の窯上半部の調査では窯内（3層）より瓦の出土が多く見られたが、今回の窯下部の調査ではあまり出土していない。焼成室の場所によって焼かれる製品が異なる可能性がある。

燃焼室内の堆積土は、焼土塊と砂状の赤色焼土である。その他の混じりものはきわめて少ないが、焼台と陶器片が少量見られる。

出土品の特徴。灰黒色焼締陶器の壷（甕）は折り返し口縁となる形が多い。焼締られない素焼き状の壷も同じ形態が多い。

出土品のうち、器形のわかる主なものは、第3次調査分も含めてFig.5～8に示した。また、図に掲げたものの出土層とその特徴については、表1～3にまとめた。

7．放射性炭素年代測定用資料

年代測定用の炭化物を以下の3箇所から採集した。

1．焼成室床面aと床面bの間の層から少量。
2．床面aの直下の炭化物層から多量。床面bを使用した最後の頃の燃焼によってできた炭化物である。
3．燃焼室第3層から少量。

8．窯跡の保護

発掘終了後、窯体上に土嚢を積み、さらに土嚢上に土砂をかけて窯跡の埋め戻し保護とマウンド現状復元を行った。今後、発掘した窯跡にたいし、どのような保存措置あるいは公開活用のための保存処置をとるか、タニ窯跡群全体の調査結果のなかで決めることになる。

9．窯跡の残り程度

窯体の遺存状況について。マウンドの斜面部分については後世による破壊が著しい。一方、現地表の平坦面より下に埋もれている部分については、燃焼室をはじめ焼成室の床面や側壁など比較的良好な状態で遺存していた。これは他のマウンドに残存する窯跡についても程度の差こそあれ、同様の傾向であると推測される。

このことは、今回の調査と同様に今後の調査においても煙道部あるいは煙出しの構造の解明には困難が伴うことを意味している。自然の斜面を利用するのではなく、人工的にマウンドを築く場合、マウンドの頂上部に煙出しを築く可能性が高く、結果的に最も遺存しにくいと思われるからである。

10. 年代

今回の調査は窯体を中心としたものであり、物原（灰原）の調査については今後の課題である。よって、製品の年代についても明確な根拠をもつには至らないが、グロリエによれば灰釉陶の初現は9世紀第4四半期であり、12世紀に入ると灰釉陶が極端に稀になるという。また、津田武徳は中国の陶磁器との類似性からクメール陶器初期灰釉陶は北宋代（960～1127）より上がらないとし、タニ窯に見られる灰釉陶の上限についても10世紀後半に置き、下限についてはグロリエの見解から11世紀後葉としている。

11. 今後の課題

次回調査は窯跡の燃焼室部分の細部における疑問点の再確認、燃焼室周辺の廃品捨て場の存在確認、工房跡の確認や生産道具類の発見等をトレンチ調査等で行うことである。また、1箇所の窯跡発掘で新たに生まれた課題を解明するためには、これを補足するための隣接マウンド調査も欠かせないのではないかと思われる。タニ窯跡群全体の保存活用を考える基礎資料を入手するためにも、B1窯の隣接マウンド調査が必要であろう。

参考文献

・杉山　洋 著：「クメール陶器研究の現状と課題」『アンコール文化遺産保護共同研究報告書1』、奈良国立文化財研究所、1997年

・ベルナール・グロリエ 著　津田武徳 訳：「アンコール王朝陶器入門～9世紀末から15世紀初め～」『東南アジア考古学』18号、1998年5月、

・津田武徳 著：「クメール初期灰釉陶と古窯址」『東洋陶磁』vol. 28、1998～1999年

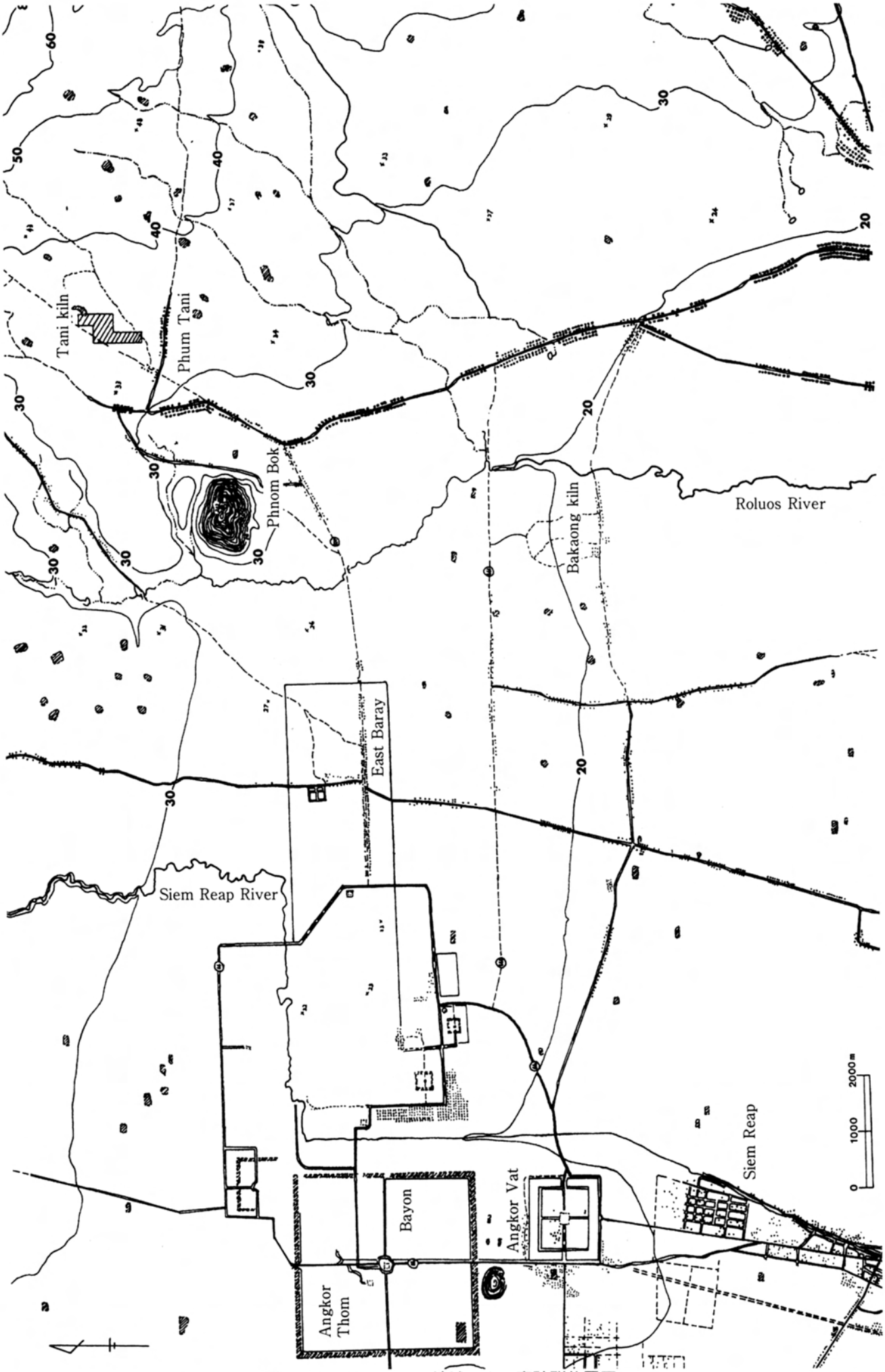

Figure 1　アンコール地域、タニ窯跡群位置図
Angkor Area and the Tani kiln complex

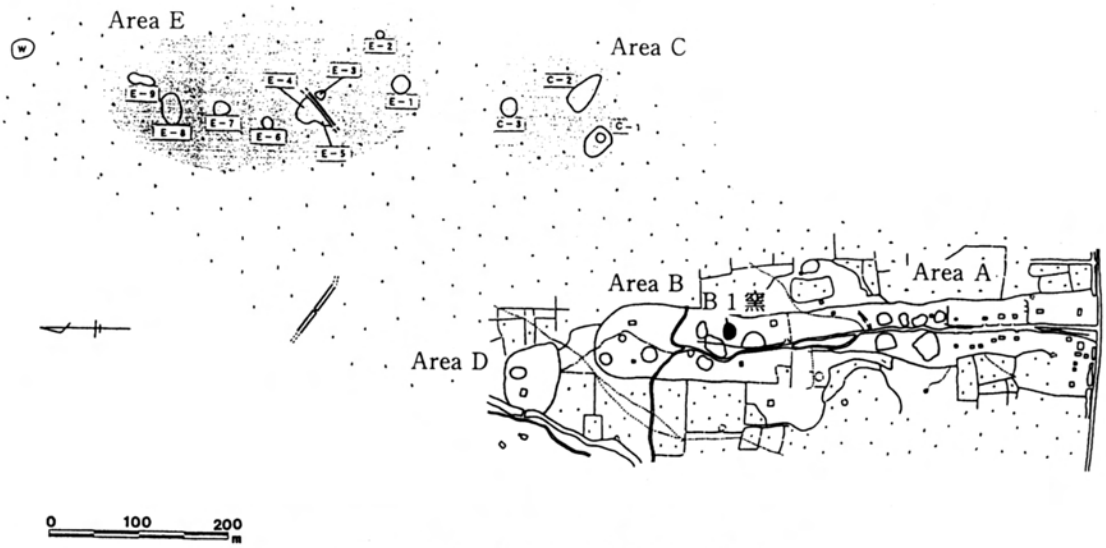

Figure 2　タニ窯跡群分布図及びＢ１窯
The Tani kiln complex and Kiln B1

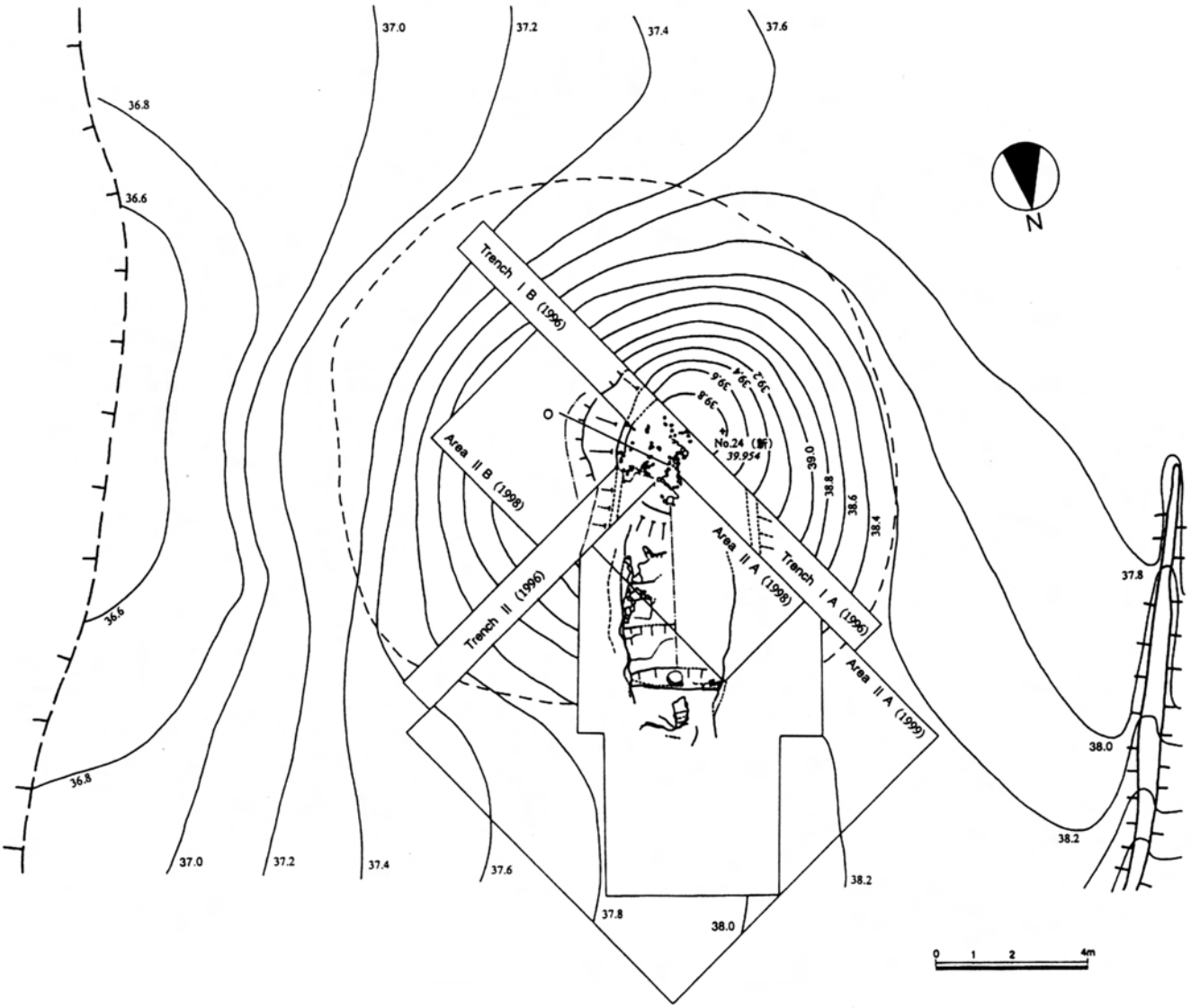

Figure 3　Ｂ１窯マウンドと発掘区平面図
The mound and trenches for Kiln B1

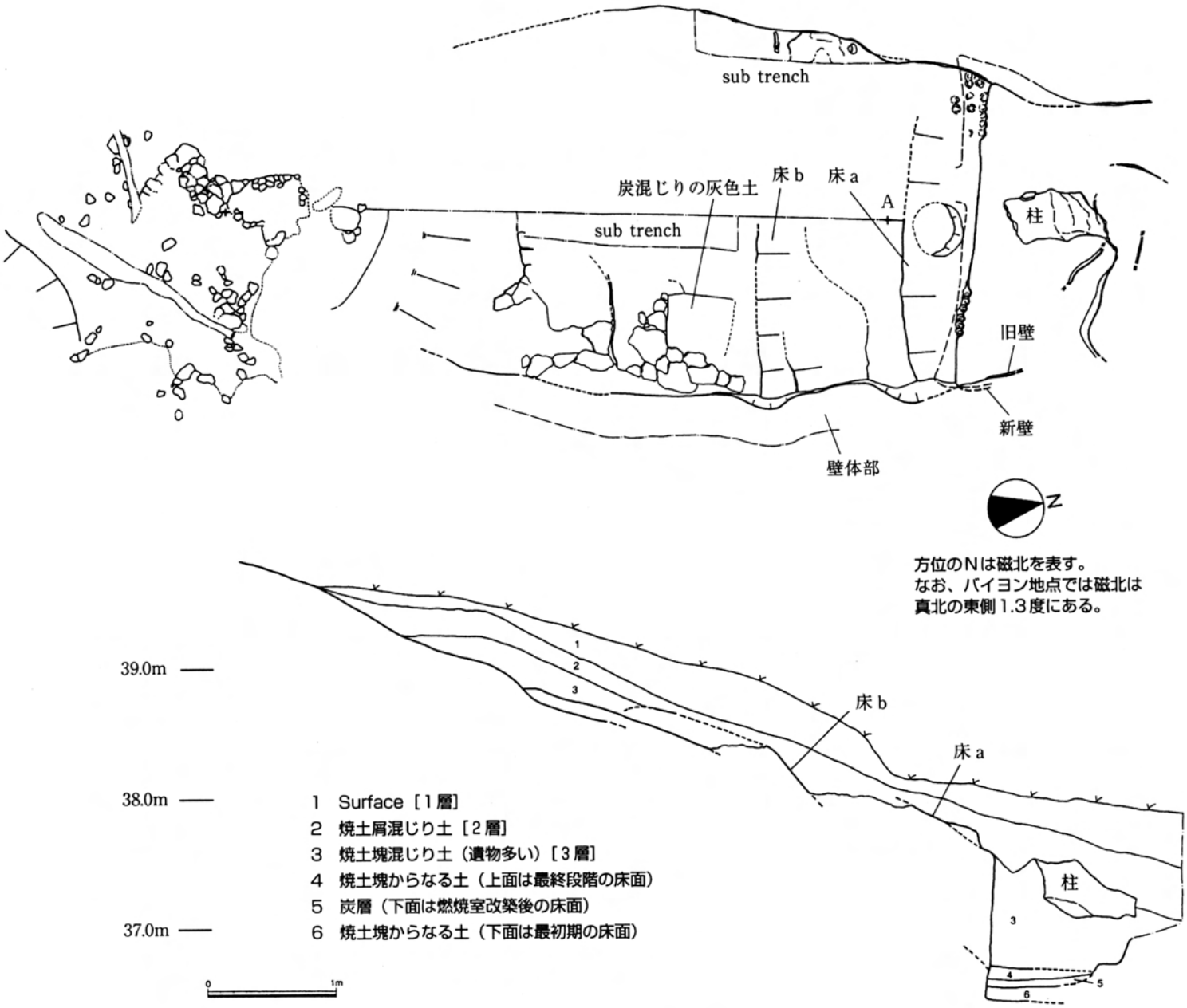

Figure 4　B１窯平面図(上)、B１窯土層断面図(下)
Plan(above) and cross section(below) for Kiln B1

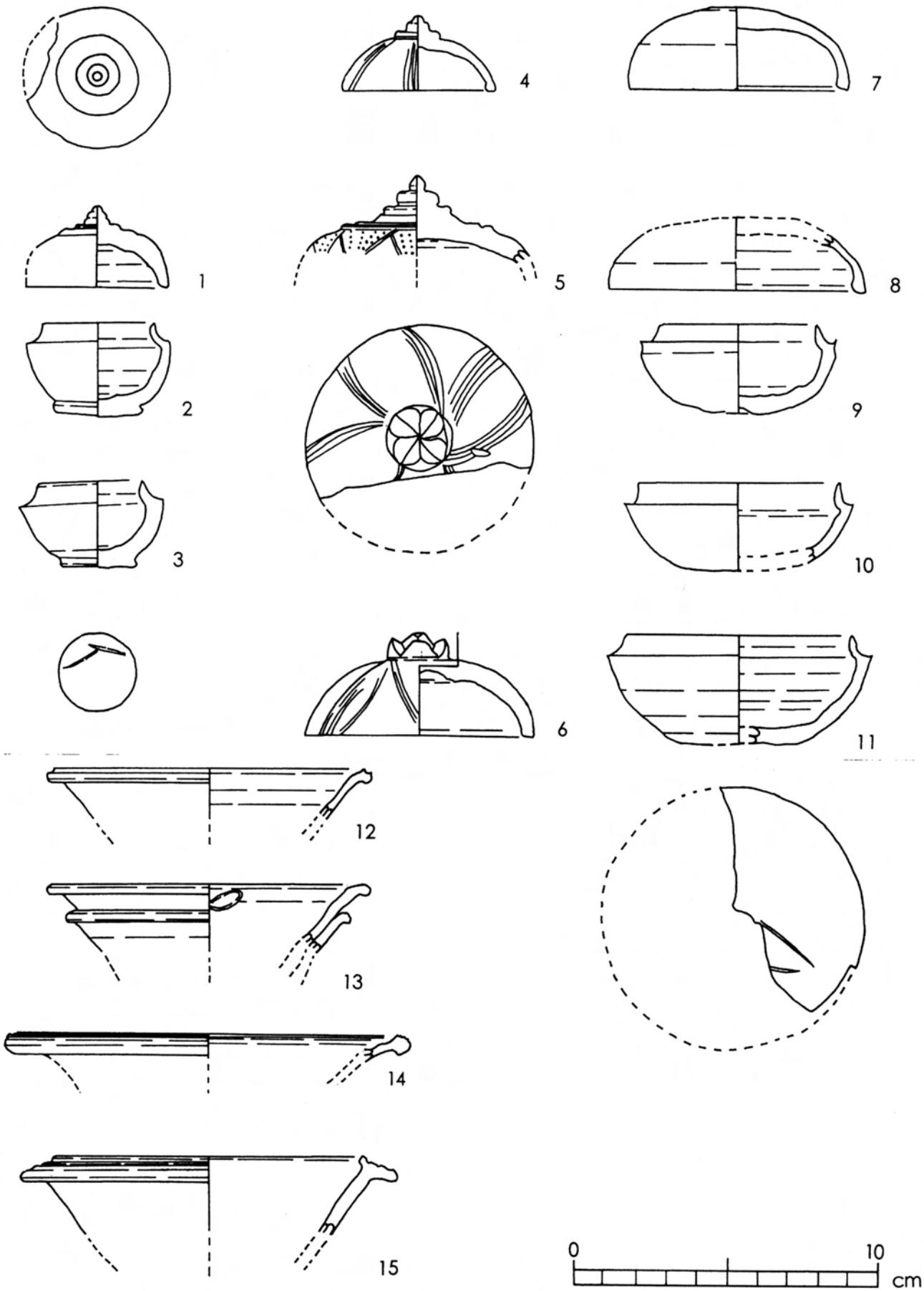

Figure 5　タニ窯跡群Ｂ区Ｍ１窯跡の出土品
Ceramics excavated in Kiln B1 in Tani kiln complex

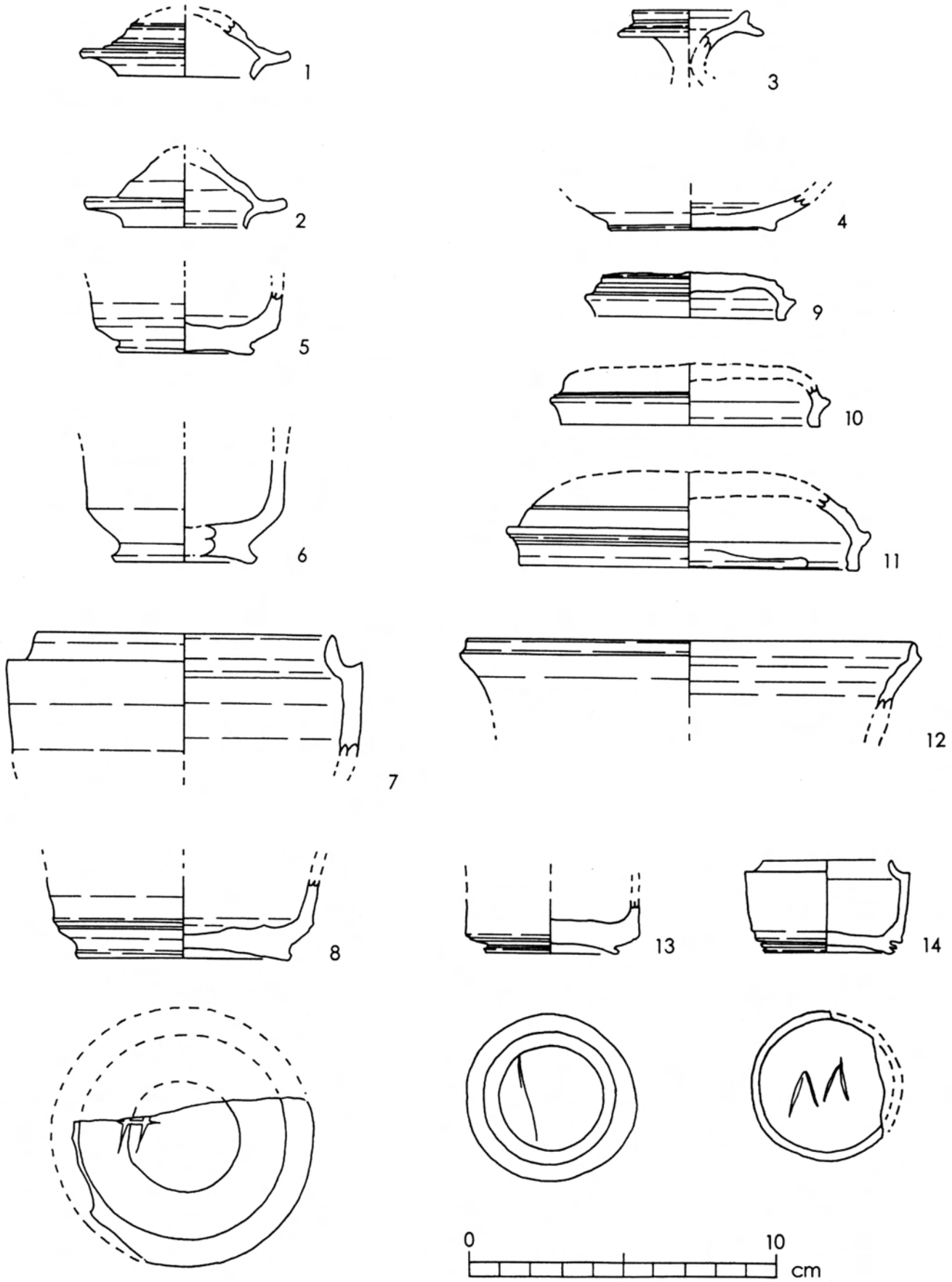

Figure 6　タニ窯跡群Ｂ区Ｍ１窯跡の出土品
Ceramics excavated in Kiln B1 in Tani kiln complex

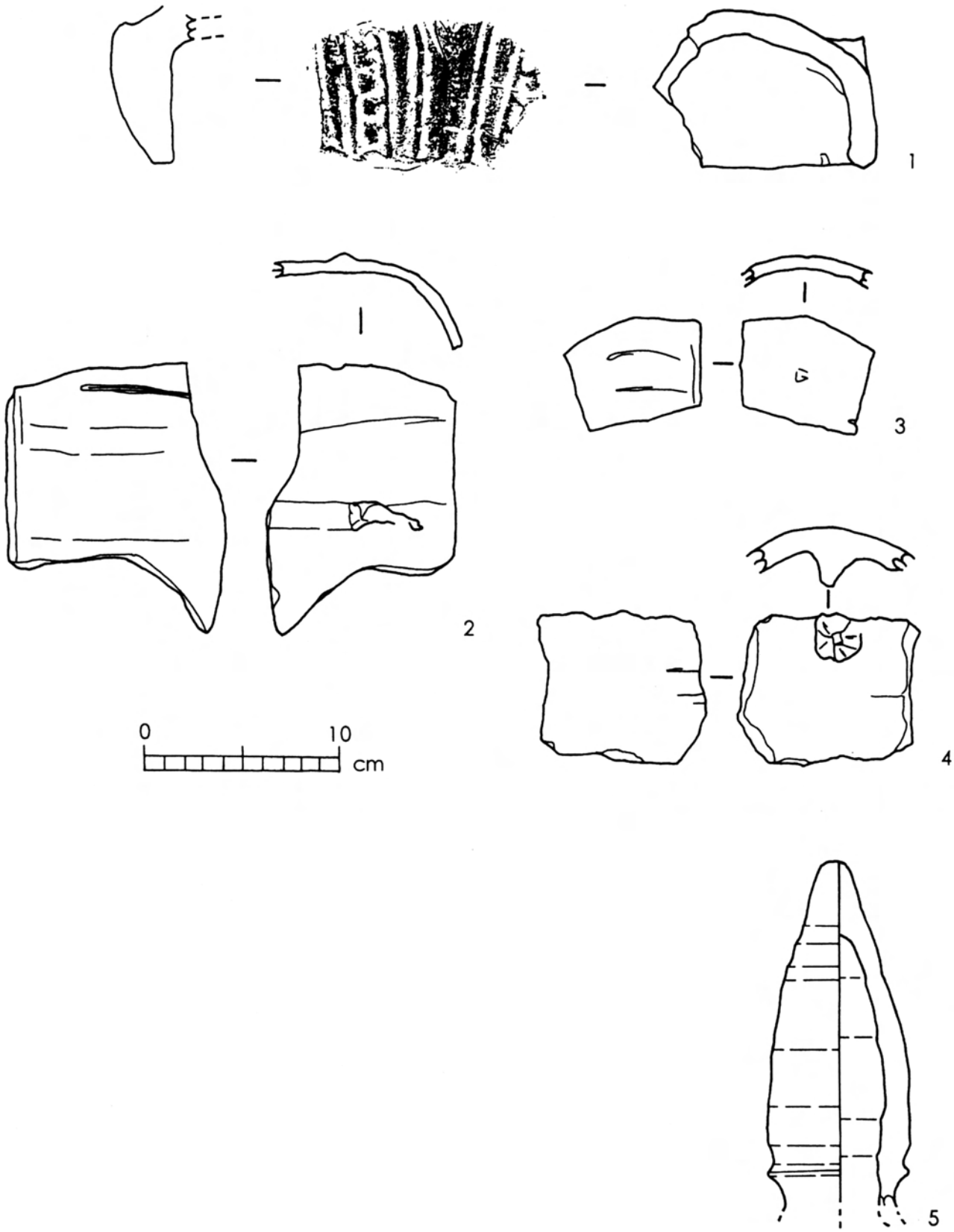

Figure 7　タニ窯跡群Ｂ区Ｍ１窯跡の出土品
Ceramics excavated in Kiln B1 in Tani kiln complex

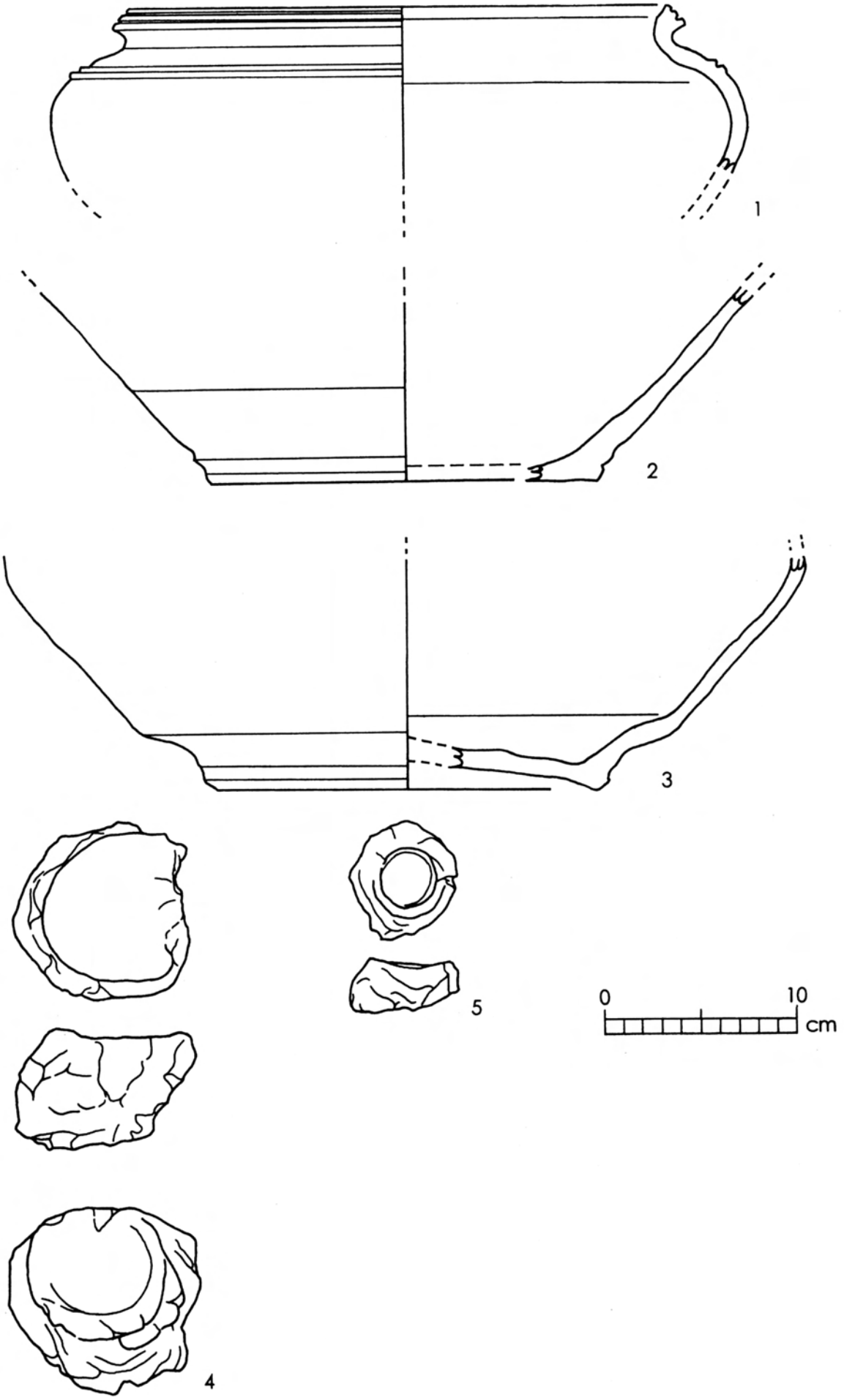

Figure 8　タニ窯跡群Ｂ区Ｍ１窯跡の出土品
Ceramics excavated in Kiln B1 in Tani kiln complex

Figure No.	Type	Marking	Layer	Glaze	Clay color	Firing	Note
5-1	合子（蓋）	9903 TANI BM1ⅡA 3	炭層	灰釉	白	不良	釉は焼成不良のため、ほとんど剥離している。胎土は、白色でもろい。 全体的な形をわずかにとどめているのみである。
5-2	合子（身）	9903 TANI BM1ⅡA 3	炭層	灰釉	白っぽい橙色	やや不良	8個の破片をボンドで接合。 釉調は黄緑色の釉が施釉されていたと思われるが、ほとんど剥離している。
5-3	合子（身）	9903 TANI BM1ⅡA 3	炭層	灰釉	灰白色	焼けすぎ	釉はほとんど剥離している。口縁部分に釉がこげたような固まりがある。 底部にはヘラ記号がある。 焼成は強く火をうけ、焼け過ぎの部分がある。
5-4	合子（蓋）	9903 TANI BM1 ⅡA	aとbとの間	灰釉	灰白色	不良	釉調：一部剥落。貫入が全体的に入る。 胎土：灰白色、密。 焼成：やや甘い。
5-5	合子（蓋）	1999 03 TANI BM1 ⅡA 1st		灰釉	灰白色	普通	＊反転復原 釉調：黄色、一部乳白色を帯びている。ほとんど剥離している。 肩部から装飾あり。刺突文。
5-6	合子（蓋）	9903 TANI BM1 ⅡA 3rd	窯内	灰釉	灰白色	良好	釉調：薄い黄緑色を呈している。 内面は、釉が一部はがれている。 口縁の周りは釉が剥落している。 胎土：灰白色。密 焼成：還元焔。良好。
5-7	合子（蓋）	199903 TANI BM1ⅡA 3rd	焚き口中	灰釉	白っぽい橙色	不良	＊反転復原 釉調は、灰釉が施釉してあったものと思われるが、釉は剥離してほとんど残っていない。胎土の構成は精緻で、中に混和剤として直径約1mmの白い小砂が混ざる。
5-8	合子（蓋）	1999 03 TANI BM1ⅡA 3rd	焚き口中	灰釉	灰白色	良好	＊反転復原 釉調は全体に薄く黄緑色の釉が施釉されている。胎土は灰白色、精緻で直径約1mmの乳白色の小砂が混入している。全体の調整が少し粗く、粘土が削れている部分が多い。
5-9	合子（身）	199903 TANI BM1 3	窯内	灰釉	白味をおびた橙色	やや不良	釉調は、黄色味を帯びた黄緑色で、ほとんど剥離している。わずかに器の内側隅、表面の一部のみ残る。胎土には直径約3mm以下の黒い斑点が表面にあり、内面には直径約6mmの大きさのものも見られる。おそらくこれらは、釉に含まれる鉄と考えられる。
5-10	合子（身）	980907 TANI BM1 ⅡB 2b		灰釉	灰白色	良好	釉調：薄く釉がかかっている。 胎土：灰白色、精緻で密である。 鉄斑あり。クーレンタイプと呼ばれるものに似ている。
5-11	合子（身）	9903 TANI BM1ⅡA 3	炭層	灰釉	灰白色	良好	釉調は黄緑色の釉が薄く施釉されている。焼成は良好で、胎土は灰白色で精緻である。直径2.5mm以下の黒い粒子を含む。 底部にはヘラ記号がある。
5-12	碗（口縁部）	1999 03 TANI BM1 ⅡA 1st		灰釉	灰白色	普通	＊反転復原 胎土：密、黒い粒子を含む。表面はオレンジ色を手押している→土の色か？ 器の内外に黒い斑点がある。（釉に含まれる鉄分か？）
5-13	碗（口縁部）	1999 03 TANI BM1 ⅡA 1st		灰釉	灰白色	良好	＊反転復原 胎土：密、表面は黄色味がかった灰白色。 重ね焼をした様子がわかる。釉がけのあとに重ね焼をしている。 口縁部分に黒い斑点（直径約2mm）が見られる。
5-14	碗（口縁部）	1999 03 TANI BM1 ⅡA 1st		灰釉	密	やや甘い	＊反転復原 釉調：ほとんど剥離。釉は口縁部分のみ残る。 胎土：直径1mmの小石が混ざる。 砂粒が右に流れていることから、左回転か？
5-15	碗（口縁部）	1999 03 TANI BM1ⅡA 3rd	焚き口中	灰釉	灰白色	良好	＊反転復元 釉調は薄く安定した黄緑色の釉が全体に施釉されている。釉の残りは良い。 胎土は灰白色で、精緻である。器表に黒い斑点がある。

表１　タニ窯跡群Ｂ区Ｍ１窯跡の出土品
Ceramics excavated in Kiln B1 in Tani kiln complex

Figure No.	Type	Marking	Layer	Glaze	Clay color	Firing	Note
6-1	壺の蓋	199903 TANI BM1ⅡA 1st		灰釉	白っぽい橙色	普通	＊反転復原 釉調は黄緑色の釉が施釉されていたと思われるが、現在はほとんど剥離していて残っていない。胎土は、器表の侵食が激しいので、胎土の色が不明。表面の色は、白っぽい橙色をしている。胎土は、精緻で直径約1mm以下の小砂が一部混ざる。
6-2	壺の蓋	199903 TANI BM1ⅡA 1st		灰釉	白っぽい橙色	やや不良	＊反転復原 釉調は黄緑色の釉が全体に施釉されていたものと思われるが、器表の侵食が激しく、釉はほとんど剥離している。また、侵食のため、胎土の色もはっきりと判らない。胎土は精緻で黒い粒子を含む
6-3	盤口瓶（口縁）	199903 TANI BM1ⅡA 3	窯内	灰釉	褐色を帯びた灰白	良好	釉調は、比較的安定した黄緑色の釉がかかる。 全体的に、盤口瓶の口縁・体部の破片の数は少ない。
6-4	碗か？(底部)	1999 03 TANI BM1 ⅡA 3rd	窯内	灰釉	白っぽい褐色	不良	＊反転復原 釉調：無釉だが胎土などから見ると、灰釉が掛けられていたか？
6-5	合子 （身）	1999 03 TANI BM1ⅡA 1st		灰釉	白っぽい橙色	不良	＊反転復原 釉調：黄緑色、ほとんど剥離している。 底部の調整と器の調整の回転方向が違う。→前者は左回転、後者は右回転。
6-6	筒型合子(身)	1999 03 TANI BM1 ⅡA 3rd	焚き口	灰釉	灰白色	良好	反転復原 釉調：灰釉（オリーブ・グリーン）、薄いが比較的安定した釉がかかる。 内面から高台裏まで釉がかかる。 胎土：灰白色、密、直径約3mmの黒い粒子を含む。 高台を軽く削り出している。
6-7	合子（身）	1999 03 TANI BM1ⅡA 3rd	焚き口中	灰釉	白色	不良	＊反転復原 釉調は黄緑色の釉が施釉されていたものと考えられるが、器の外側の釉はほとんど剥離していて残っていなく、内側もごく一部残るのみである。胎土は、焼成不良のため、白い。精緻な胎土を用いている。直径約1mmの透明な小砂が混ざっている。小砂が比較的多い。
6-8	合子（身）	1999 03 TANI BM1ⅡA 3rd	焚き口	無釉	灰色	良好	＊反転復原 釉調は無釉。胎土は灰色で、精緻。直径約1mmの小砂が混和材として混ざる。また、黒い小さな粒子を含む。焼成は須恵器のように硬質に仕上がっている。底部に刻印あり。
6-9	合子 （蓋）	1999 03 TANI BM1 ⅡA 1st		灰釉	白っぽい橙色	やや甘い	3個体を接合。 釉調：薄い黄緑色→ほとんど剥離。 胎土：表面に黒い斑点を残す→釉に含まれる鉄分か？
6-10	合子（蓋）	1999 03 TANI BM1 ⅡA 1st		無釉（灰釉）	白橙色	不良	＊反転復原 胎土：直径約1mm以下の白い小砂を含む。 左回転の調整痕あり。
6-11	合子（蓋）	199903 TANI BM1ⅡA 3rd	焚き口の中	灰釉	灰白色	良好	＊反転復原 釉調は黄緑色の釉が薄く全体に施釉されている。胎土は精緻な灰白色をし、直径約1mm以下の小砂が混和材として混ざっている。焼成は良好で堅緻なしあがりになっている。
6-12	合子（身）	199903 TANI BM1ⅡA 3	窯内	灰釉	灰白色	良好	＊反転復原 釉調は黄緑色の釉が全体に施釉されているが、器表の釉はほとんどはぜている。胎土は、灰白色で精緻である。 器形はおそらく合子の身であるが、口縁のかえりが甘く、丸みを帯びているため、はっきりとした形はわからない。おそらく筒型の合子の身と推定できる。

表２　タニ窯跡群Ｂ区Ｍ１窯跡の出土品
Ceramics excavated in Kiln B1 in Tani kiln complex

Figure No.	Type	Marking	Layer	Glaze	Clay color	Firing	Note
6-13	合子（身）	1999 03 TANI BM1ⅡA 3rd	焚き口	灰釉	灰白色	良好	＊反転復原 釉調は黄緑色の釉が薄く全体に施釉されている。胎土は灰白色で精緻である。胎土にはほとんどなにも混ざらない。底部にヘラ記号がある。 高台を少し削り出したような痕が確認できる。
6-14	合子（身）	1999 03 TANI BM1 ⅡA 1st		灰釉	灰白色	良好	＊一部口縁部分にゆがみがある。 釉調：黄色味を帯びた黄緑色。→釉が黄緑色を帯びる原因に土に含まれる鉄分が作用しているのか？ 底部に刻印を持つ。
7-1	瓦頭	199903 TANI BM1 ⅡA Col		無釉	赤紫色	焼きすぎ	胎土：赤紫色　直系3mm以下の黒い粒子を含む。　焼成：焼きすぎ
7-2	瓦	980908 TANI BM1GⅡB-2b		灰釉	白色	不良	釉調は黄色の灰釉が全体に薄く施釉されているが、ほとんど剥離している。 胎土は焼成不良のため、白いが精緻なものである。 調整が丁寧である。非常にうす作りで、0.6cmという厚さを均一に保っている。 また、平瓦に見られる突起帯が欠損している。
7-3	瓦	980907 TANI BM1 TⅡA2nd		灰釉	灰白色	良好	釉調：薄く全体に施釉されている。 胎土：灰白色、直径1.5mm以下の黒い粒子が混ざる。　焼成：還元焔
7-4	丸瓦	9903 TANI BM1 ⅡA 3rd		無釉	白っぽい橙色	不良	胎土：直径1mmの白くて透明な小石と黒い粒子が混ざる。 焼成：不良、酸化焔を受ける。　突起帯をあとづけにしている。
7-5	棟飾り	980907 TANI BM1 GⅡB-2a		無釉	白ぽい橙色	不良	胎土は粗く、直径約1～2mmの白い透明な小砂を含む。また、黒い粒子もある。この棟飾りは砲弾型のものので、内部は空洞で、粘土紐を巻き上げて作った痕が残る。
8-1	甕	9809 TANI BM1 GⅡA		無釉	橙色	不良	胎土：直径約1～3mmの小石（黒く酸化）が混ざる。　焼成：不良
8-2	甕	9809 TANI BM1 ⅡA		無釉	橙色	焼きすぎ	＊反転復原 胎土は粗い。 火を強く受けたせいか、器壁が大きくゆがんでいる。
8-3	甕	9809 TANI BM1 ⅡA		無釉	褐色がかった橙色	良好	胎土は粗い。 火を強く受けたせいか、器壁が大きくゆがんでいる。
8-4	焼き台	199903 TANI BM1 ⅡA 3rd		無釉	橙色		胎土：直径2mm以下の小石混ざる。 焼台の周囲に粘土を巻きつけて新しい焼き台を作っている。
8-5	焼き台	199903 TANI BM1 TⅡA3rd	焚き口の中	無釉	橙色		胎土：瓦の無釉の胎土と類似している。混和材としての小石は含まないが、表面に1mm以下の黒い粒子が混じる。

表３　タニ窯跡群Ｂ区Ｍ１窯跡の出土品
Ceramics excavated in Kiln B1 in Tani kiln complex